



生存からサバイバル文化へ 民具に見る継承の役割

スチュアート ヘンリ Henry STEWART

民具の研究は長い間、主に民俗学の独壇場であったが、最近文化人類学でも「民具」はモノの研究対象として注目されている。モノの研究は民具研究と重なるところが多いが、民俗学における民具は主に主流社会の庶民、もしくは常民が使う生産用具を含めて生活用具をさす用語である。文化人類学における「モノ」は、それぞれの国家の主流社会のモノの研究も、少数・先住民族やエスニック集団の生活用具全般も研究対象としている。また、用具そのものだけではなく、用具の材料をどのように採取・入手するのか、用具の所有や管理のあり方などの側面にまで調査する。

さらに、生活用具の使い方のほかに、用具のもつ社会政治的な意義について文化人類学者が追究する。表題にある「生存からサバイバル文化へ」に込められている意味は、イヌイトの事例にみられるように、そもそも生存のためだった用具が近年、文化的なサバイバルとして活用されていることである。それはどのようなことであるかということ、少数・先住民族にとって民族の独自性 主流社会とは異なるエスニシティ が表象方法の一つとされている。つまり、伝統的な用具を使って伝統的な生業活動を行なうということである。たとえば、8~9月に魚掬で石造りの築でホッキョクイワナをとって冬の保存食とする活動には、イヌイトのエスニシティを外に向けて表象するとともに、自らのエスニシティを確認・強化する意味がある。

現在の極北の村にあるコープの店でありとあらゆる工業製品や、アボカドからインスタントラーメンまでの食料品を店で買えるので、狩猟と漁撈をしなくとも生存は可能である。それでも魚掬で漁撈を行なうのは、イヌイトがイヌイトであるという証であるからである。マーセル・モースが『エスキモー社会：その季節的変異に関する社会形態学的研究』で指摘しているように、石造りの築で集団が集まり保存食を蓄えるとともに、イヌイトの世界観では一年を夏と冬に分け、夏の間には家族単位の行動から、地域集団が集合して冬の集団生活に切り替えるイベントとして、築漁に社会的な意義があった。その伝統が今のイヌイト社会に引き継がれている。

1950年代までの季節移動生活は、カナダ政府が設置した定住村に変わり、イヌイト社会の近代化が一気に進んだ。衛星テレビを見ながらセントラル・ヒーティング完備の5LDKの家に住む現在のイヌイトであるが、漁撈をはじめアザラシ猟、カリブー猟を続けている。日本の農民とは違って、イヌイトの「近代化」は必ずしも自発的、自主的ではなかったが、「近代化」は「伝統」を滅ぼしているのではなく、数千年前から変わりつつある「伝統」が今でも状況に応じて変化していることを如実に示している。伝統の継承と近代への適応の蝶番の役割を果たしているのが、生活用具＝民具である。この視点からして、日本の民具研究は世界に広がる可能性をもっているといえる。



只見シンポジウム 講演風景

- ① 佐野 賢治氏による司会進行
- ② 佐々木 長生氏による講演
- ③ 周 星氏による講演
- ④ 河野 通明氏による講演
- ⑤ スチュアート ヘンリ氏による講演

